

三豊市の新たなバイオマス産業

昨年3月、三豊市バイオマスタウン構想が、国のバイオマス・ニッポン総合戦略推進会議から認定を受け、現在その実現に向け事業を進めています。その構想とは、バイオマス産業とはどういう内容なのか、お知らせします。

バイオマスって何？

「バイオマス」という言葉、分かってはいるつもり、でも、何だかほんやりとした感じがするという思いを持たれている人は案外多いのではないのでしょうか。その原因の一つは、生態学としてバイオマスを理解しようとするあまり、何だか分かったようで分からない世界に入り込んでしまうのかもしれない。

政府が平成18年に閣議決定した「バイオマス・ニッポン総合戦略」では、「家畜排せつ物や生ごみ、木くずなどの動植物から生まれた再生可能な有機性資源」のことをバイオマスと定義しています。

この総合戦略の考え方は、有限の化石資源をバイオマスで代替させ循環型社会へ移行させようとするものです。人類は、古来から、太陽のエネルギーを使い生物によって生産された食料や木材などのバイオマスを利用して生

活を営んできましたが、近代になり、経済的な豊かさや利便性を求めて発展する過程で、その生活基盤の多くを、枯渇が予測される石炭や石油などの化石資源に依存する体質が拡大してきました。つまり、今日の大量生産・大量消費・大量廃棄の社会システムは、自然が持つ浄化能力を超え、地球温暖化などの環境問題を深刻化させています。

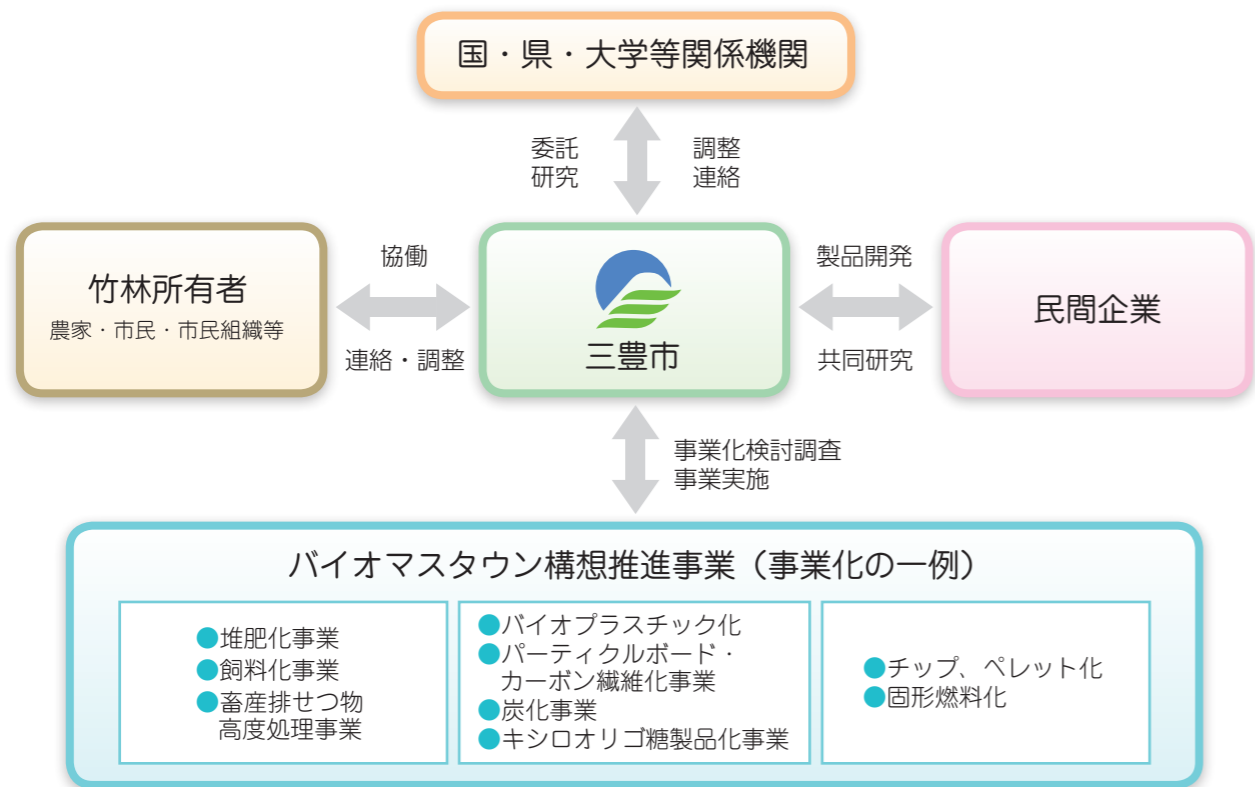
三豊市が取り組もうとしている「バイオマスタウン構想」は、三豊の美しい海や山などの地域環境を保全しながら、三豊市由来のバイオマスを産業資源として開発し、地球温暖化の防止や循環型社会を形成しようとするもので、荒廃竹林の竹も産業化の資源、家庭から出されるごみも、単に処理するだけでなく、バイオマスとして再利用させようとするものです。

「共存」のように、竹は1年間で最終的な大ききまで成長してしまいます。これは、樹木が何十年もの時間をかけて成長するのは違い、驚異的な成長力といえます。三豊市の里山には、どんぐりなどの実をつける広葉樹の森が多く分布していましたが、この森は、タケノコ栽培をしていた竹林と同じ位置に共存していたことから、拡大竹林は、これら広葉樹の森に侵入し、その驚異的な成長力で樹木を枯死させ、里山の植生を変えているのが現状となっています。



竹の資源化に向けて取り組むため、荒廃竹林を試験的に伐採しました

バイオマスタウン構想推進体制



三豊市の竹林

三豊市の南部地域(高瀬、山本、財田)には、広大な竹林が分布しています。この竹林は、かつて主要農産物としてタケノコが導入され、次第に作付面積を増やしていったものの、その後、加工用タケノコの輸入が増加し、昭和60年代ごろから、急激にタケノコの収穫量が減少する中で、現在の荒廃竹林が形成されてきました。

県農林水産統計年報のデータでは、三豊市のタケノコ収穫量は、昭和60年代には年間約1万トンでしたが、これが、平成7年には約3千トン、平成12年には約500トンまで激減しています。つまり、この収穫量の減少とともにタケノコ竹林は放置され、荒廃化したもので、現在も荒廃竹林の拡大は続いています。

平成21年度に三豊市バイオマスタウン構想を策定しましたが、その時点の調査では、高瀬、山本、財田地域の合計竹林面積は、約1,200haとなっています。予測では、そのうち管理されている竹林は10%程度で、残りの約90%、面積にして約1千haは放置竹林化していると考えられています。

竹林の荒廃化

竹は地下茎で成長し子孫を残そうとします。その速さは年に約2メートル程度と言われており、まずは竹林内において植生の密度を高め、竹林内に広がるのが不可能になると、その周囲

竹林の資源化

三豊市バイオマスタウン構想は、この竹林の荒廃化を逆手に取り、竹林資源を産業化することにより、自然環境の保全と産業振興を合わせて推進しようとするものです。

現在、竹の持つ特性を研究し、製品化の可能性を求めて全力で取り組んでいます。安易な出発は、事業の経済的な破綻という人為的二次災害を引き起こすことにも意を払わなければなりません。可能性には野心を忘れずに取り組みつつ、一方で冷静かつ客観的な目を持つ必要があります。

今月から、バイオマスタウン構想の具体的な内容について、これから行うこと、課題・可能性などを3回にわたってお知らせします。

▼問い合わせ
バイオマスタウン推進室 ☎73・3028